

ある以上、もともと本書に「野心作」を期待すべきではないであろう。そしてその意味ではコンパクトに要領よくまとめられており、重宝な書であると言いうことができる。講読のテキストなどにも好適であろう。

(九二頁 一九七七年 London, Macmillan)  
(八塚春児 京都教育大学講師)

G. J. Mosse

### *Toward the Final Solution*

副題に *A History of European Racism* とあるように、本書は一八世紀から第二次世界大戦までのヨーロッパにおける人種主義の展開を扱ったものである。ユダヤ人に対するナチの蛮行を支えたイデオロギーが人種主義的反ユダヤ主義だったのはすでに周知のことであるが、このヨーロッパ思想上の恥部は従来正當な扱いを受けていたとは言いがたい。著者の目指すところは、人種主義が通俗的に捉えられているように、ヨーロッパの知的伝統からの逸脱なのでなく、逆に近代史の正統な一所産であることを示すことである。

本書は三部構成になっていて、第一部は

「端緒」と題され、一八世紀に人種思想が成立し、一九世紀にゴビノーラによって整備されていく過程を追う。主要な論点は、人種主義の成立要素として啓蒙主義と敬虔主義が大きく寄与したこと、当時の人類学が人種分類を行なう際に美的基準が導入され、後に人種主義の基本的思考形式になる、人種の価値的なステレオタイプ化を招いたことである。また人種の観点が国民的観点にすりかわって、ナシヨナリズムを促進した点も指摘される。「浸透」と題された第二部は、確立した人種主義がヨーロッパ諸国に普及していきつつ、同時に新たな要素を吸収していく過程を跡づけている。たとえばイギリスに成立したダーウィニズムや優生学、アメリカの降霊術などがその例である。そして人種主義が二〇世紀に入ると、人類学、優生学等の学問的方向と、人間優劣差を強調する神秘主義とに分化していく傾向に注意を向けている。このような論点の中に、フランス、ドイツなどの反ユダヤ主義組織の活動の叙述が織り込まれるが、教会との関連に一章を割いて、キリスト教がなしくずしに人種主義的思考に感染していく様を追跡しているのは興味深

い。第三部「完成」は第一次大戦後の状況に始まり、ヨーロッパ諸国における反ユダヤ主義にまで言及していくが、核心をなすのはナチのユダヤ人迫害と大虐殺の経過であり、その意味で本書のクライマックスである。ここで前提として繰り返し強調されるのは敗戦と革命であって、大戦前にはフランスと比べて決して人種主義の盛んでなかったドイツが、結局ナチズムの反ユダヤ主義を経験する理由もそこに求められる。そして学問と神秘主義の分化した傾向は、ホロコーストの実行において再び統一を見るのであり、その規模と並んでこのような意味でも、ナチのユダヤ人虐殺は人種主義の極点と見なされうる。

以上の簡単な紹介でわかるように、本書はナチズムに収斂する人種主義の通史である。著者の視野はほぼヨーロッパ全域に渡っており、また神秘主義的な人種観念にとどまらず、広く擬似科学的な著作をも丹念に渉猟している。とくに第三部では、ともしれば看過されがちな東ヨーロッパにおけるファシズムの対ユダヤ人政策にも焦点をあて、人種主義あるいは反ユダヤ主義とファシズムの内的連関を考えるうえでの格好

の材料を提供している。まさしく人種主義思想を概観する場合の好個の研究と言つてよいだろう。図版は決して多くないが、それでも重点をおさえた構成になっている。非合理主義的な思想、觀念が社会的に拡大していく際には、視覚的要素は非常に重要な宣伝手段となるのだが、本書に収められたポスター等は、たとえばステレオタイプ化されたユダヤ人像がどのようなものであったかを、読者に説得的に理解させるのに役立つだろう。

このように本書はバランスのとれた好著なのだが、その方法には若干疑問が残る。個々の思想家を社会的脈絡から切り離して扱い、そうしてナチズムの源流を適及的に追求していく方法は、すでに多くの批判を蒙っている。しかも、高次の抽象度をもつ社会思想と異なり、日常のルサンチマンが直接的に投影されやすい人種主義などの場合、思想の成立する社会的背景を抜きにして、思想史として構成するのは妥当だろうか。著者の場合、あまりにもストレートにナチズムに引きつけられているように思われる。もっとも著者もこの点には相応の注意を払っていて、本書のいたるところで人

種主義と社会層の関連を説き、中産階級のイデオロギーとして位置づけようとしている。思想史と社会史とを、単なるお題目でなく、実際に一箇の論理に総合することの困難を考えると、この問題は本書によりも、むしろわれわれに投げかけられていると言えよう。

その他、反ユダヤ主義を人種主義を基準にして分類する著者の基本的視角などにも疑問の余地があるが、しかしそれらは本書の価値を大幅に減じるものでない。人種主義思想を、自由主義・社会主義と並ぶ、ヨーロッパの知的伝統の嫡出子として俎上にのぼす著者の姿勢は貴重であり、その点に本書のメリットは尽くされよう。とりわけこの分野の研究状況を考えれば、われわれは有意義な一書を手にしたことを喜びたい。

(二七七頁 一九七八年 London, M. Dean  
(竹中 亨 京都大学大学院生)

### 編集後記

街路樹の葉が色づき、初霜の便りが聞かれる頃となりました。やや遅れましたが、六二巻六号をお届けします。本号には戦国

期畿内荘園の精緻な分析を試みた田中倫子氏「戦国期における荘園村落と収取」、十五世紀中央アジア史の先駆的業績となるであろう堀川徹氏「シャイバニー・ハンとアルクーク城」、墳墓の構造から漢代政治史へも迫ろうとした西村俊範氏「漢代大型墓の構造」の、いずれも新進気鋭による力作三篇を得、ノートには服部良久氏にドイツ中世都市史を取上げていただきました。(明)

一九七九年十月二日印刷  
一九七九年十一月一日発行 定価七五〇円

史 林 (第六二巻第六号)

京都市左京区吉田本町  
京都大学文学部

発行人 史 学 研 究 会

理事長 島 田 虔 次  
振替京都五一五五番

印刷所 中村印刷株式会社  
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇